# 篠崎小竹の転向

森　川　　　潤

（受付　2020 年 9 月 3 日）

## はじめに

篠崎小竹は，「詩，文，手蹟の三拍子」そろった文人[1]として知られるが，小竹塾は大坂における「経学を主とした本格的な儒学研究の場」のひとつである[2]。

小竹は，天明元（1781）年４月，大坂京町堀で開業する豊後杵築出身の医者加藤周貞の次男に生まれる。それは，徂徠の没後50年あまりのちのことである。寛政２（1790）年，９歳の小竹は徂徠学を奉じる篠崎三島の儒学塾にかよいはじめる[3]。この年の５月には，寛政異学の禁が諭達され，幕府の学制改革がはじまる。徂徠学詩文派の拠点である混沌社を主宰する片山北海が没したのもこの年である。小竹は，寛政５（1793）年ころ，嗣子のない三島の養子にむかえられる。

徂徠の没後，朱子学批判を基調とするその独創的な学説は，津津浦浦にひろまる。安芸竹原の頼春水，伊予川之江の尾藤二洲のように，生地では徂徠学を奉じる儒者しかいないために，少年期に徂徠学に染まった人びとも少なくない。それは，儒学の主流を占めていた朱子学が新興の古学，とりわけ徂徠学にその地位をうばわれたことを意味する。大坂でも，菅甘谷，片山北海などが塾をひらき，徂徠の学説は熱狂的にむかえられる。北海は，明和初年に甘谷塾生を鳩合し，混沌社を結成する。三島は，甘谷，北海のもとで経学と詩学をまなぶ。

本稿では，小竹が朱子学に転向した経緯について考察し，町儒者としてどのような儒学を講じたか検討する。そのために，まず大坂に移植され，根付いた徂徠学がどのような性格をもち，それが小竹の転向にどのようにかかわったのか検討する。ついで，小竹がみずからの意思で徂徠学から朱子学に転じる過程について考察する。小竹の伝記などには，断片的ながら小竹の儒学観に関する記述が散見される。それらを拾いあつめれば，小竹が徂徠学を忌避し，朱子学にたどりつく過程について輪郭を描くことができるであろう。

## Ⅰ．家学徂徠学

### 1）大坂の蘐園学士

江戸で生まれた徂徠学は，京摂でも，徂徠の没（享保13（1728））後，元文元（1736）年ころから寛延年間（1747～1750）のころまで，儒学界を席巻する[4]。そのころ，大坂で講席をもうけた徂徠学派系の儒者として，林東溟，菅甘谷，橋本楽郊，菅沼東郭，片山北海の名が

あげられる。

林東溟は，宝永 5（1708）年に長門に生まれ，少年期から山県周南に師事する[5)]。周南は，宝永 2（1705）年，江戸におもむき，荻生徂徠に入門する。周南は，下野那須出身の安藤東野とともに徂徠最初期の門人である。宝永 5（1708）年 6 月に萩にかえり，萩藩儒者になる。周南は，萩藩に徂徠学をもたらし，藩学明倫館第二代祭酒として萩藩に徂徠学を定着させたといわれる[6)]。しかし，服部南郭が茅場町の徂徠に入門した正徳元（1711）年ころ，徂徠の思想はのちに「徂徠学という鬱然たる体系の中に組みこまれるさまざまな主張」が断片としてあらわれはじめたばかりであった[7)]。周南が，徂徠のもとでまなんだのは，「程朱ノ説」である[8)]。東溟が周南のもとでまなんだのは，いわゆる徂徠学であろうか。周南の後輩の南郭は，「長門」には「精密ナル学問ハナシ」と酷評する[9)]。詩文についても，「長門ノ詩ハ極メテソマツナリ」といった評価をくだす。東溟は，享保17（1732）年ころ，24歳のとき，「浪華」におもむき，「講説」する。その後は，京都に居住し，京坂でひらかれる詩会にも参会する[10)]。

菅甘谷は，延享 2（1745）ころ，50代半ばで大坂阿波堀に塾をひらく。甘谷は，元禄 4（1691）年に播州姫路藩士の子に生まれ，のちに泉州岸和田藩士の養子にむかえられる。20年あまり江戸に在勤するが，その間，荻生徂徠に師事する。致仕したのち，大坂にうつり，「師説」をとなえる[11)]。「大坂の地物氏の學を唱ふるは此人より起る」といわれる。「物氏の學」は，物茂卿，すなわち徂徠の学説である。甘谷門下には，篠崎三島，葛子琴，田中鳴門，岡魯庵（元鳳），細谷斗南（半蔵）などがいる。甘谷門下には，葛子琴の兄の橋本楽郊（葛蠹庵（とあん））もいた。楽郊も講席をひらき，門生をうけいれるが，いつごろのことか詳らかではない。篠崎三島，葛子琴は楽郊に従学する。楽郊は，宝暦15（1765）年に長逝するが，前年に甘谷が没していた。菅甘谷の略伝には，「徂徠ニ学ブ」，「徂徠物夫子之徒」[12)] と記載されるが，自称門人のひとりかもしれない。

片山北海は，宝暦 3（1753）年ころ，京都から大坂に移りすみ，私塾をひらく。北海は，享保 8（1723）年に越後弥彦村の農家の子に生まれる[13)]。幼いときから学問を好み，旅人などに四書をまなぶ。「田舎遠國ナドハ，書ノトモシキ，師ノ得ガタキ，學友ノナク」[14)] という情況のなかで，18歳のときに上京し，元文 5（1740）年，宇野明霞（士新）にめぐりあう。明霞は，元禄11（1698）年，近江野洲に生まれ，幼少のころ，家業を手伝い，京坂間の貨客輸送のため淀川を航行する過書船の仕事にたずさわっていたが，一念発起し，柳川滄洲に師事する。明霞は，滄洲により「明風の詩」にみちびかれ，「徂徠の古文辞」にいざなわれる[15)]。徂徠のもとで研鑽をつんだ禅僧大潮から詩文を教えられ，詩文の世界にはいる。「一家の家風」をたてるために経学も研鑽する。明霞は，延享 2（1745）年に没する。

北海は，「富商某」の支援により大坂にうつり，阿波橋の北詰にすむ。のちに平野町淀屋橋

筋北横町に孤松館をひらき，経学と詩文を教授する。木村蒹葭堂は，18，19歳のころに北海に入門し，「漢籍の句読」をうけ，「四書六経，史漢文選等」の「講義」を聴く[16]。「六経」は，徂徠学の名残である。

菅沼東郭は，元禄３（1690）年に江戸に生まれる。「東郭先生墓銘」[17] は，東郭が徂徠に師事したことがあるか，いつごろ大坂で門人を受けいれはじめたか言及しない。東郭は，服部南郭を模した名であろうか。

篠崎三島は，元文２（1737）年，紙問屋をいとなむ大坂町人の家に生まれる[18]。家督をつぎ，伊予屋長兵衛をなのり，家業にはげむ。三島は，余暇には，医者の橋本貞元（葛子琴）などとともに，甘谷，その高弟の橋本楽郊のもとで徂徠学をまなぶ。

宝暦（1751〜1764）中期以降，甘谷の門下生は，北海とその門下生と頻繁に交歓するようになる[19]。甘谷は，宝暦14（1764）年３月に没するが，その後間もない明和２（1765）年９月，甘谷門下の葛子琴，田中鳴門，細合半斎（斗南）が発起人になり，混沌社を結成し，北海を盟主にえらぶ。三島，木村蒹葭堂，菅野錢塘など，ほとんどの甘谷の門下生がくわわる。のちに頼春水，尾藤二洲，古賀精里も混沌社同人になり，菅茶山，中井竹山なども詩会に参加する。三島は，混沌社同人はもとより，混沌社の詩会に集う人びととも交遊する。

**図１**　堂島・中之島界隈　大坂絵図　寛政元年刊：播磨屋九兵衛：国立国会図書館デジタルコレクションインターネット公開（保護期間満了）

**2）蘐園派の衰廃**

江戸にも，大坂の徂徠派についてつたえられる[20]。

> 洛畿ノ間ノ学問，大ニ軽率浮過ナルコト也。中ニ大坂甚シ。大坂ニテハ予ハ徂徠門人，予ハ南郭門人ナド云タテ，ソレニテ口ヲキヽテ，少シノ学問モナキ人多シ。学問ノ浮過ナル上ニ，無頼ヲ加味シタリ

京坂の「学問」は，あまりにも軽率で，浮き草のようである。大坂では，延享（1744〜

1747）のころから,「徂徠門人」,「南郭門人」などと自称する儒者が講説するが，少しも「学問」をおさめたことがないものが多い。かれらは,「学問」が浮薄であるだけでなく，放蕩無頼の雰囲気をただよわせる。生学問（なまがくもん）の徂徠派の講説が大坂町人の教養層のあいだに浸透する。

徂徠は,「道徳的価値」に従属していた政治と文学に「固有の領域と論理」があることを提示し，従来の儒学から逸脱した独創的な学説をとなえる[21)]。儒教の基本的教義のひとつである修己治人は，五常の道徳を修養し，五倫秩序の実現に努力することである。徂徠は,「放縦自恣。以㆓修身ヲ㆒為ス㆓禁忌㆒」[22)] といわれるように，無頼漢のように「修身」，すなわち道徳的修養を忌みきらう。徂徠は，朱子学を信奉する人びとに「學事爲㆓諸子百家曲藝之士㆒，而不㆑願㆑爲㆒道學先生㆓」[23)] という挑発的な言辞をなげかける。頑固頭の道徳主義者になるよりは，雑学舌先三寸の士になったほうがましである，という。

徂徠学は，徂徠の門人の代から経学派と詩文派にわかれ，詩文派は「私的な自己解放を放恣に実現させるもの」として一世を風靡する[24)]。政治と道徳を分離し，政治を優先する徂徠は，朱子学の道学主義を嘲笑い，生来の「文学を愛好する精神」を重視する[25)]。文学は，言語を媒体として自己の思想や感情を表現し，人間の感情や情緒に訴えるものである。詩文は，儒学をまなぶものの余技であったが,「徂徠学の本質をなす一部」である[26)]。

服部南郭の門人である湯浅常山は,「蘐園ノ学士」の「学問」について，つぎのように述べる[27)]。

> ＜前略＞学者ハ大カタハ人柄悪シキ。学問スル人ノ中ニ偏屈ナル人ハ迂遠ニナリ。才気アル人ハ放蕩ニシテ，文人無行ト云ヤウニナル。＜中略＞学問ハ何ノタメゾ。今日言行一致，修身斉家ノ道ヲ学ブナリ。蘐園ノ学士ハ経学ハ訓詁ノミニテ，文章ヲノミ専ラトスルユヘ，放蕩無頼ノモノ多シ。宋学ヲ尊奉スル儒者ハ其弊尠シ。＜後略＞

岡山藩士の常山は，享保17（1732）年にはじめて出府したさい，南郭に入門する。その後，なんどかの江戸在府のあいだに，南郭，太宰春台の門人松崎観海（君脩）などの徂徠派の人びとと歓談する。常山のような西国諸藩の人びとが上府の途次，蔵屋敷のある大坂にたちより，大坂で見聞した徂徠派の動静などを江戸にもたらす。引用部は，篠山藩士であり，太宰春台の門人でもある松崎観海が常山に話した内容である。「学問」の目的は,「修身斉家ノ道」をまなぶことである。にもかかわらず，徂徠学の徒は，経学をまなぶとしても，古語の解釈までで，もっぱら詩文をまなぶために，道徳的修養をつむこともなく,「放蕩無頼」のものがおおい。「蘐園ノ学士」は，経学より詩文に関心をよせる。経学は，聖人の道を記した儒家古典を精読し，聖人の道を明らかにすることを目的とする「学問」である。その「学問」をおさめることもなく，自己を解放するという文学にむかえば,「放蕩無頼」にならざるを得ない。

大坂で熱狂的にむかえいれられたのは，徂徠学無頼派である。混沌社が，詩文を愛好する大坂の上層町人の拠点になる。しかし，早々に反徂徠の立場を鮮明にしたのも，大坂の儒学

界である。江戸滞在中，徂徠の学説を批判し，『非物篇』の執筆をはじめた五井蘭洲が，元文5（1740）年に帰坂し，幕府の學問所である懐徳堂の助教につく。菅甘谷，片山北海が来坂し，私塾をひらくまえのことである。片山北海を盟主として混沌社が結成されるのは明和元（1764）年のことである。やがて，徂徠学の悪評がひろがり，「徂徠の教にては子弟放蕩になりやすくて，其親兄弟も学問をする事を制するやうに」なる[28]。片山北海の門下から「朱子学攻究のグループ」[29] が生まれたのは偶然ではない。

## Ⅱ． 江戸遊学

安永6（1777）年ころ，40歳になった篠崎三島は，玉水町の伊予屋の店をたたみ，犬斎橋の隠居所にうつり，梅花社をひらく。おおくの町人子弟が入門するが，そのなかに加藤金吾もいた。金吾は，天明元（1781）年4月，京町堀両国橋南詰で開業する豊後杵築出身の医者加藤周貞の次男に生まれる[30]。「幼而頴異好二読書一」み[31]，9歳のころに三島塾にかよいはじめる。寛政5（1793）年，13歳のころに三島の養子にむかえられる。金吾は，三島の継嗣として「家学蘐園古文辞」をおさめる。のちに長左衛門となのり，小竹と号する。

小竹が17歳のころ，寛政10（1798）年4月，江戸遊学から帰藩する頼山陽が，叔父の杏坪にともなわれ，篠崎家にたちよる。山陽は，安永9（1780）年12月，小竹が生まれる前年，おなじ大坂の江戸堀に生まれる。春水は天明元（1781）年，杏坪も天明5（1785）年に広島藩儒者に登用され，広島にうつる。杏坪は，広島藩学問所で朱子学を講じていたが，寛政9（1797）年，春水にかわり，世子伴読として江戸におもむく。山陽は，杏坪に随行し，永田馬場の広島藩上屋敷に起居し，昌平坂学問所の敷地内にある尾藤二洲の役宅にかよう。役宅は家塾でもあるが，山陽は，毎日，「朝五ツ」（8時）から「晩七ツ半」（16時）まで，幕臣の子弟とともに「看書」する[32]。春水は，大坂遊学中，二洲とともに「朱子学攻究のグループ」を結成する。のちに古賀精里もくわわる。杏坪も，そのグループのひとりである。二洲の妻は，山陽の母静子の妹直子である。

山陽は，麹町半蔵門外の麹渓書院にもでむき，服部栗斎にも教えを乞う。栗斎は，大坂懐徳堂の五井蘭洲のもとでまなび，江戸で村士玉水に闇斎学をまなぶ。山陽の父春水は，江戸在勤のときには，栗斎と「学術講修」のために会合する。杏坪も栗斎に師事する。山陽は，7歳ころから杏坪のもとでまなびはじめ，天明8（1788）年には藩の学問所にはいる。父春水は，江戸勤番のさいには，幕府の学問所に出講するだけでなく，「異学禁の策謀者の一人」[33] として儒学界でも知られた存在である。小竹は，儒者の名家である頼家の御曹司，山陽に羨望の念をいだく。

小竹は，一歳年長の山陽に刺激をうけ，義父三島に江戸遊学を懇願する。江戸遊学は，家学である徂徠学を修学するという条件で許可される。小竹は，翌寛政11（1799）年，江戸に

おもむき，尾藤二洲の役宅に寄寓する[34]。小竹が昌平坂学問所の敷地内の二洲の役宅に滞在したのは，学制改革が進行するさなかであった。

天明７（1787）年，松平定信が老中首座につき，幕政改革に着手する。寛政２（1790）年５月，改革の一環として異学の禁が諭達される。それは，封建教学再建のために朱子学を振興し，これを官学として明確に位置づける朱子学による人心教化と社会的統合をはかろうとしたものである。大坂で塾をひらいていた尾藤二洲は，翌寛政３（1791）年に幕府儒者を命じられ，翌年には昌平黌敷地内の役宅に移り住む。寛政８（1792）年５月には，古賀精里が昌平黌儒者を命じられ，柴野栗山，二洲とともに学制改革にとりくむ。寛政９（1797）年12月には，林家の私塾であった昌平黌が幕臣のための昌平坂学問所として再編される[35]。昌平黌は，士庶をとわず，全国各地から負笈する「英髦」を受けいれてきた。「黌制」改革が実施され，従来の生徒を退寮させ，職員を罷免し，「大夫子及子弟」，すなわち旗本と御家人だけを講習の対象とする。

その４年後の享和元（1801）年８月，大学頭林述斎，尾藤二洲，古賀精里は連署し，「学問所書生寮増之儀申上候書付」を提出する[36]。林家はもとより，二洲，精里も，それぞれ家塾をいとなみ，塾生をかかえていた。昌平黌の改革ののち，二洲と精里は「陪臣浪人之遊學人共」を敷地内の役宅に受けいれていたが，役宅が「手狭」になる。幕府儒者は，「志厚き候もの陪臣浪人たりとも相拒み候筋に有之間敷」と考えるが，もはや「指置候場所」もなく，「願出候者」を拒絶せざるを得ない。大学頭とふたりの「掛り儒者」は「厚志之者とも自分賄にて入寮仕候へは罷在候場所計は何卒御取建被下度候」と願いでる。享和３（1803）年，幕府は「陪臣浪人之遊學人共」をうけいれるために書生寮を建造する。学舎の西南にあった二洲の役宅を書生寮とし，敷地の西南角と東北角に教官住宅を各一戸新設し，それぞれ二洲，精里の役宅とする[37]。昌平坂学問所は，士庶をとわず，全国各地の俊秀を受けいれる正学派朱子学の教育・研究センターになる。

小竹は，養母の危篤のしらせがもたらされ，大坂にもどる。その後，妻をめとる。小竹が江戸におもむき，二洲に師事したのは，「徂徠派の家學」に懐疑的になったからである。しかし，三島の後嗣として妻帯し，家学に専念せざるを得なくなる。あるとき，小竹は「汝才學已具矣，但識未足耳」，才学はあるが，学識にとぼしいと三島に指摘される[38]。小竹は，徂徠の『論語徴』を読み，「李王」，すなわち中国明代に古文辞をとなえた李攀龍と王世貞の著述を繙読する。徂徠学に疑念をいだいたであろう，小竹は，徂徠と古文辞に関する著述を読み，そのうえで「洛閩之書」，すなわち北宋中期（11世紀中ごろ）の程顥，程頤などの学説，その学説を集大成した朱熹の学説に関する書を読み，「道學」を講究したいと請願する。三島は，小竹の希望を拒むことなく，『朱子詩文集』，『朱子語類』を購求する。小竹は，「洛閩之書」を熟読し，「遂三得レ専意奉二程朱一」，すなわち程朱学を奉じることを決意する。

小竹は，文化５（1808）年春，「恐㆓王父君不㆒㆑許」，三島の諫止をおそれ，「潜出游㆓江都㆒」，ひそかに江戸に遊学する。しかし，江戸に届けられた書簡から「知㆘王府君不㆓唯不㆒㆑責㆑君，怡然容㆖㆑之」，養父が小竹を叱責することなく，遊学を容認していることを知る。三島は，徂徠学無頼派の所業に不快感をいだきながら躊躇していたが，このころ，みずから「転向」することを決意したのであろう。旧知の古賀精里に小竹をゆだねる。小竹は，昌平坂学問所の敷地内の精里の役宅に止宿する。28歳の小竹は，精里の家塾生[39]として７歳年少の侗庵と机をならべたであろう。精里の三男，侗庵は，その翌年，文化６（1809）年に幕府の儒者見習に任用され，昌平坂学問所で教鞭をとる。

小竹は，江戸滞在中，小倉藩儒者の倉成龍渚の「詩会」にでかけたり，大田南畝をたずね，「叙㆑旧」したりする[40]。龍渚は，寛延元（1748）年，豊後宇佐に生まれる[41]。宝暦12（1762）年に中津に遊学し，藤田敬所の家塾に入門する。明和４（1767）年，京都にのぼり，伊藤東所に師事する。東所は，伊藤東涯の３男であるが，寛延４（1751）年に祖父仁斎がひらいた古義堂をつぐ。龍渚は，安永６（1777）年，中津にもどり，中津藩儒者に登用される。寛政２（1790）年には藩学創設に参画する[42]。龍渚が江戸にいたのは，藩主奥平昌高の参府に随行し，藩邸に滞在していたからである。蘭方医の坪井信道は，修業時代の文化４（1807）年に江戸勤番の龍渚の家塾に入門する。龍渚は頼杏坪，大窪詩仏とともに不朽社という詩社を主宰していたが，小竹が龍渚をたずねたのは，旧知の杏坪に詩会にまねかれたからである。

『寝惚先生文集』で知られる大田南畝は，寛延２（1749）年，御徒大田正智の子として江戸牛込仲御徒士町に生まれる。20歳ころから狂歌，狂詩，洒落本，黄表紙，咄本などの才を発揮するが，松平定信の幕政改革がはじまると，文筆活動をやめ，御徒の勤務のかたわら研学にはげむ。寛政６（1794）年には昌平坂学問所での学問吟味に首席でとおり，２年後に支配勘定に昇進する。享和元（1801）年には大坂銅座，文化元（1804）年には長崎奉行所に出役し，１年ほどで江戸にもどり，文政６（1823）年に没するまで江戸で勤務する。南畝は，享和元（1801）年から１年ほど大坂に在勤するが，その間，上田秋成，木村蒹葭堂などと交遊する[43]。小竹は，大坂滞在中の南畝とは面識があった。

小竹は，精里のもとにころがりこんでから数ヶ月後，精里から「老親を振すてヽ何時までも遊学して居るばかりが能でもあるまい」とさとされ[44]，文化５（1808）年４月下旬には養父のもとにかえる。小竹は，江戸において，寛政正学派の尾藤二洲，古賀精里に師事し，朱子学の学統をうける。古希をむかえた三島は，小竹に塾生の教育をゆだねる。

## Ⅲ．小竹朱子学の位相

### 1）徂徠の学説

篠崎小竹は，はじめ徂徠学に染められるが，のちに，みずからの意思で徂徠学から朱子学

に「転向」する。それは，徂徠学から朱子学へという直線的な過程ではなかった。陽明学をまなんだり[45]，あるいは折衷学，考証学などの諸学派の学説を一瞥したり，いくつかの選択肢のなかから，朱子学を選びとる。その経緯は，小竹の伝記などから窺い知ることができる。

小竹は，あるとき友人につぎのように述べる[46]。

> 學者學レ爲レ人也，身無二失行一，而睦二於親戚一，信二於朋友一，是爲レ人也，爲レ人如レ此，亦可二以不一レ畔矣夫

小竹は，まず徂徠の学説については，ふたつの観点から排除する。第 1 は，徂徠が「功利」に馳せ，「道徳」を捨てた[47] 点である。それは，人倫を軽視する徂徠の学説に対するアンチテーゼとしてかたられる。「学」は，人としてふさわしい道をまなぶことである。道徳や常識からはずれた行いをすることなく，親戚とは親しく交わり，友情にあつく友を欺かない，これが人として行うべき道である。人は，重層的に錯綜する関係のなかで生きている。儒学では，人間関係は父子，君臣，夫婦，長幼，朋友の 5 種類に整理されるが，それぞれの関係のあいだで重視されるのが親，義，別，序，信という徳，すなわち五倫である。5 つの人倫関係を支障なく実現するためには，人は日常的に 5 つの徳，すなわち仁，義，礼，智，信をまもらなければならない。

小竹は，町儒者として「政を家に為す」ことを課題にする[48]。「政を家に為す」は，『論語』[49] をふまえた表現である。

> 或謂孔子曰，子奚不爲政，子曰，書云，孝于惟孝，友于兄弟，施於有政，是亦爲政也，奚其爲爲政

孔子は，政治にたずさわらない理由をたずねられる。人としてまもらなければならない五常の道徳，すなわち義，慈，友，恭，孝を修養することによって，「家庭内の秩序をきちんと保つこともまた政治である」[50] と孔子は答える。孔子のように，「生まれながらにしてこれ（五常）を知り」「安んじてこれをおこな」う聖人[51] もいるが，「自天子以至於庶人，壱是皆以修身為本」（「天子より以て庶人に至るまで，壱に是れ身を脩むるを以て本と為す」）[52]。五常の徳を修養するのは，五倫秩序を実現するためである。それによって，社会の基礎単位である家の秩序を維持することができる。家は，核となる成員の集合体をもふくめた人びとの生活共同体を意味する。家をととのえることができれば，国が治まり，天下が平らかになるであろう。「修身・斉家・治国・平天下」は，儒学におけるもっとも基本的な実践倫理である。

小竹は，町儒者として儒学塾をいとなむ。小竹のもとでまなぶのは，大多数は大坂の町人である。豊かな町人，農民のなかには，実生活に必要であるために，崩し字の候文を読み書きできるものが増加し，やがて遊芸のように師匠，すなわち儒者のもとで儒学をまなぶものもあらわれる。かれらは，「古のひじりのをしへを学んで，人となれる道」をまなび[53]，修身につとめる。修身は，統治のためではなく，封建秩序のなかで自己の実現をめざすための手

段にほかならない。小竹が講じたのは，「政を家に為す」ことの意義についてである。

第２は，徂徠が「新－奇ノ説」をとなえたことである[54]。「新説」ともいわれる[55]。

經學不レ在辨二注解之同異得失一，在二習而熟一レ之耳，習而熟レ之，則胸中浹洽自成二我用一[56]

朱熹は，四書を『大学』，『論語』，『孟子』，『中庸』の順にまなび，そのうえで五経をまなぶという学習法を確立する。前漢の武帝の時代（前141～前87）に五経博士が設置され，まず五経をまなび，ついで『孝教』，『論語』，『孟子』をまなぶという学習課程が整備される[57]。このころに制度化された五経中心の学習法は，朱熹により四書中心に移行する。

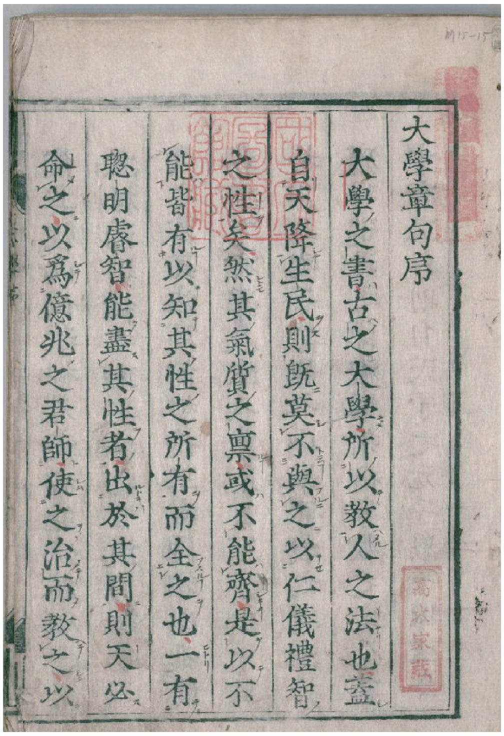
大學章句序
大學之書古之大學所以教人之法也蓋
自天降生民則既莫不與之以仁儀禮智
之性矣然其氣質之稟或不能齊是以不
能皆有以知其性之所有而全之也一有
聰明睿智能盡其性者出於其間則天必
命之以爲億兆之君師使之治而教之以

図２　大学章句：朱熹撰，林道春点・校正，『四書集註』，弘簡堂，天保３（1832）年：国立国会図書館デジタルコレクションインターネット公開（保護期間満了）

経学は，経書，すなわち四書五経のなかに埋め込まれた中国古代の聖賢の教えを探りだすことを目的とする学問である。四書は，北宋の先人たちの業績を継承し，それらを集大成した朱熹の注解，すなわち「四書集註」を参看しながら読むべきものである。「四書」のもっとも標準的な注釈書が「四書集注」である。「厭二注疏之煩一」，「注疏」を読むのが煩わしいとして厭えば，その「深意之所」を窺い知ることはできない。朱注は経書と同等の価値が認められ，経書テクストと同じ大きさの文字で刻字される[58]。朱子学における経学は，「注解」の「異同得失」をあきらかにするのではなく，朱注をふくめた四書を中心として儒学倫理を体系的に把握しようという営みである。江戸期には「四書集注」は大量に出版され，多数の人びとが繙読する。経書テクストが経，注釈が注，その解説が疏と呼ばれる。漢代・唐代にまとめられた注釈は古注と呼ばれ，宋代にまとめられた注釈は新注と呼ばれる。

宋以後，講レ學者各有レ所二発明一，要レ之無レ若二朱氏之完善一也，支離拘泥則學者之過耳[59]

宋代以後，程顥，程頤，朱熹のように「学」を講ずるもののなかには「発明」するところがあった。朱熹が程朱学を集大成したのち，朱子学を信奉するもののなかから，さほど独創的な思想家は生まれない[60]。朱子学は，精緻な思想体系である。「程朱ノ論」は「極メテ精－細真－実」である[61]。「新－奇ノ説」が浸透したとしても，束の間のことであり，やがて「廃－

替」し，一顧だにされなくなる。小竹は，朱熹の「完善」，思想的な完成度を認識していた。小竹に「著書＝經學に關する＝がない」[62] のは，精緻な「程朱ノ論」について論述する「新説」がないからである。

柴野栗山によれば，伊藤仁斎，荻生徂徠が「新説」を唱え，「豪傑」の世評をえるが，とくに徂徠は「好勝心」，すなわち功名心による虚構を描いたにすぎない[63]。徂徠が「但（ただ）朱子を排するにのみ心を傾けるゆゑ，此の疎謬（そびゅう）の言を生ぜり」ことは知られている[64]。しかし，古典テクストを恣意的に曲解することはゆるされない。

## 2）諸学派の経学

小竹は　折衷学，考証学などの学説については直接には言及しないが，朱子学にたどりつく過程においては，諸学派についても概略を把握していたはずである。小竹塾には，「藏書おびたゞしく，古書の収藏に富」んでいた[65] ために，書籍を借覧するために入門するものもいた[66]。蔵書のなかには，「洛閩之書」だけでなく，徂徠，その他の学説に関する書籍もふくまれる。小竹は，読書人である。

小竹が折衷学，考証学などの学説に共鳴しなかったのは，「経学」の概念の相違を認識したからである。中国では，「経学」は歴史的に「三大変」があった[67]。それは「訓詁」を得意分野とする「漢学」，「義理」に秀でる「宋学」，「考証」に長じる「清学」である。江戸幕府草創期には，朱子学（宋学）が移植され，儒学の主流をなす。「儒風」は「大抵性理ニ基キ」，「躬行ヲ主トセリ」[68]。「躬行」とは道徳的実践である。その後，朱子学の鬼子として「伊物ノ説」がうまれ，経学に実証的な研究への道をひらく。しかし，「物徂徠」の学説がさかんになると，儒者のおおくは「浮華放蕩」にながれ，「躬行ヲ務ムル者」がいなくなる。やがて朱子学的な「義理」重視の思想に回帰しようという傾向が顕著になり，「宋學ニ歸スル者」が多くなるが，「宋學ノ弊」も認識され，「程伊物ノ説」を「互ニ取捨スル」「折衷学」や考証学をとなえるものもあらわれる。

大田錦城は，主著『九経談』において「義理」について述べる[69]。『九経談』は，小竹が20歳のころ刊行される。

> 學問之博ハ過二前古ニ一然絶不レ論二義理當否ヲ一而唯欲援據之多カランヲ書名人名充二牣巻帙ニ一而義理之學荒ル矣予名レ之ヲ曰二書肆學ト一四書六經ハ義理之淵藪考據ハ傳注疏釋之學義理ハ本也考據ハ末也考據之精ハ欲レ得二義理之微ヲ一也考據雖レ博義理舛乖ナハ則亦何ノ用ソヤ乎且也考據之學其所費レ精ヲ則在二瑣義末理一聖道ノ大原ハ則措テ而不レ講是亦近世者之弊也

清朝の考証学は，訓詁学や宋学にくらべれば，該博さがもとめられるが，「義理」，すなわち人のふみ行うべき道について論ずることはない。ひたすら論拠を明確にし，書名や人名を明示しなければならない。実証性だけをもとめれば，「義理之学」はなおざりにされる。錦城

は，清朝考証学を「書肆学」と嘲弄する。「四書六経」は「義理」の淵藪である。「考拠」，すなわち考証学は「伝注疏釈之学」，すなわち伝書，注疏の解釈学にすぎない。「義理」は人の道の本源であり，「考拠」は末にすぎない。該博であるとしても，「義理」にそむけば，「何ノ用」にもたたない。「考拠之学」が緻密さのために費すのは「瑣義末理」のためであり，「聖道ノ大原」，すなわち聖人の道にいたる根元について講ずることはない。

考証学は，中国の清初（17世紀後半）に定着するが，「ある文献の成立，語句の意味，文字の異同等を，他の文献と比較検討し，客観的証拠によって確定する学問の方法」である[70]。日本にもつたえられ，錦城は「考証家」とみなされる[71]。しかし，錦城自身，考証学の徒であるとは考えていない。錦城は，考証学は「義理」について論ずることはない，したがって無用の学であると明言する。徂徠の没後，朱子学に回帰する風潮がみられるが，錦城は経書研究には文献学的研究方法をとりながら，「義理」という点では，朱子学の信奉者にほかならない。当時の儒学界においては，朱子学回帰の傾向は一般的であった。

朱子学回帰の動きは，逸早く大坂において顕在化する。しかも，大坂における徂徠学の拠点である片山北海のもとでまなぶ若い人びとあいだにおいてである。そのひとりである頼春水は，親元では徂徠学をまなび，遊学した大坂で「洛閩之書」にであい，朱子学に「転向」する。徂徠の学説に傾倒する人びとは，古文辞学という「学問」と「人物」を相即不離のものとみなさない[72]。春水は，風紀が弛緩し，社会が動揺し，混迷をふかめる時代には，「程朱」学が「深切著明」であると断定する。朱子学に転じた春水は，安永２（1773）年，27歳のときに大坂江戸堀北に私塾青山社をひらく。程朱学が，春水の周囲に浸透したのは，「学問」は道徳的修養にもとづく人格形成（「人物」）にほかならないという春水の主張に共鳴するものがおおくなったからである。

備後神辺の菅茶山は，混沌社の詩会にもしばしば参会し，春水，篠崎三島などとも親交があった。茶山は，京都の那波魯堂のもとでまなび，徂徠学から朱子学に転じるが，「学問の第一は行実なり」[73] が持論である。「行ひ」を先行し，孔孟の教えにてらし，聖人の道にしたがうのが，「学問」の要諦である。それが「宋賢」の帰着するところである。「近時の人」は「訓詁文字の異同を正すを事とする」が，それは経書研究の矮小化であるとも述べる。

小竹は，まず，徂徠の学説における道徳軽視と「新奇ノ説」に反撥し，徂徠学からはなれる。小竹の経学は，「注解」，すなわち「四書集注」を参看しながら四書テクストを熟読し，古聖賢の「深意之所」を窺い知ることをめざす。真摯な探究から「発明」があったり，「新奇ノ説」が生まれたりすることはない。つぎに，小竹は実践的な道徳的修養をふたたび儒学の中枢に位置づけようと考える。徂徠の学説は，原理主義的な道学主義への反撥としてひろくうけいれられ，儒学界に浸透する。やがて，徂徠学の反道徳性が露呈し，徂徠の季節は去る。徂徠学が儒学界における主導的学派の地位を折衷学や考証学にゆずりわたす。折衷学は徂徠

の実証的な学問方法論を継承し，考証学派は文献学的傾向をさらにつよめる。徂徠学はもとより，折衷学や考証学は，「義理」，すなわち実践的な道徳的修養ではなく，文献学的研究方法にもとづく解釈学にすぎない。

大阪で生まれた「朱子学攻究のグループ」は，学問はつねに実践躬行をともなわなければならないという主張に同調する儒者をまきこみ，朱子学正学論をとなえる。正学論の主唱者は，朱子学以外の諸学派をいずれも排斥するが，最大の排斥の対象としたのは徂徠学である。徂徠学の洗礼をうけた人びとが朱子学の「正学」化のながれを生みだす。正学論は，「朱子学攻究のグループ」のつぎの世代に属する小竹にもひきつがれたとみるべきであろう。

## おわりに

徂徠の学説は，まず関西，九州，四国にひろまり，享保（1716～1736）以後，全国に流布する。徂徠熱におかされた人びとのもとで儒学の手ほどきをうけた西南諸国の青年のなかには，上坂し，大坂における徂徠学の拠点である北海のもとでまなぶものがいた。そうした青年のなかから，「朱子学攻究のグループ」が生まれる。グループの中核には，安芸竹原の頼春水，伊予川之江の尾藤二洲，肥前佐賀の古賀精里がいた。かれらは，同調する儒者とともに朱子学正学論をとなえ，寛政改革を主導する幕閣にはたらきかける。異学の禁を策動した人びとは寛政正学派と呼ばれる[74)]。正学は学問であると同時に，倫理でなければならない。正学は，儒家古典の解釈学であるだけでなく，実践的道徳をともなわなければならない。個人的な道徳実践にとどまらず，倫理的な価値の実践におよぶのが，正学である。異学とみなされるのは，正学である朱子学以外の徂徠派，折衷派，考証派などの諸学派であるが，その中心は徂徠派であった。徂徠没後，60年あまりもたっていたが，徂徠の学説がいかにおおくの人びとに衝撃をもってむかえられ，いかに毒性と感染性がつよかったか窺い知れる。

篠崎小竹は，大坂で生まれ，少年期に徂徠学の洗礼をうけるが，のちに朱子学に転向する。転向の過程は，第１は，徂徠派への反撥である。小竹は，まず，その学説については，反道徳性と「新奇ノ説」に隔絶感をいだく。つぎに，その学説が誘発する「蘐園ノ学士」の人間性に不快感をおぼえる。個人としての道徳的修養を忌避すれば，「放蕩無頼」の刻印を甘受しなければならない。徂徠派は，「軽薄の風俗」の地[75)] でひととき生彩をはなつ。第２に，小竹は，折衷派，考証派などの諸学派の言説や学説に接することがあったとしても，共鳴することはなかった。これらの諸学派が「異学」とみなされたのは，「新規ノ説」をとなえるだけでなく，「義理」をなおざりにし，「風俗」をそこなうからである[76)]。

第３に，小竹が朱子学にたどりつくのに，ふたつの誘因があったとおもわれる。ひとつは，頼山陽とのであいである。山陽は，寛政10（1798）年４月，江戸遊学から帰藩する途次，篠崎家に立寄る。山陽は，前年，江戸におもむき，広島藩上屋敷に起居し，昌平坂学問所の敷

地内にある学問所儒者の尾藤二洲の役宅にかよう。山陽の父春水は，天明元（1781）年に広島藩儒者に登用され，江戸勤番のさいには昌平坂学問所に出講する。「洛閩之書」にひかれ，朱子学に傾斜しはじめた小竹は，正学朱子学の牙城でまなんだ山陽に羨望の念をいだく。小竹は，のちに京都で開塾した山陽と刎頸のまじわりをもつ。

もうひとつは，小竹が一歳年長の山陽に刺激をうけ，２度，江戸に遊学し，寛政正学派の尾藤二洲と古賀精里に師事したことである。寛政２（1790）年に異学の禁が諭達されたのち，二洲と精里は，幕府の昌平坂学問所の儒者に招聘される。小竹が昌平坂学問所の儒者に師事することができたのは，養父三島が，ふたりとは親しい間柄であったからである。小竹は，寛政正学派のふたりの儒者から朱子学の学統をうける。

小竹は，商業都市大坂において儒業を生業とする。幕府は，幕政改革の過程において，埋もれかかった道徳を儒学のなかにとりもどすために，正学朱子学をとりこむ。「異学」が流行し，風紀がみだれるなかで，封建的身分制を再編・強化する必要があった。商人層は，封建的身分制社会の枠組みのなかで，みずからの行動や思考の基準を「分際」におく。町人の「学問」は，「治国平天下」ではなく，あくまでも「修身斉家」の実践にある。「修身斉家」は，自己の修養により家の存続と繁栄につとめることである。庶民のなかには，市井の儒者の生計をなりたたせるほどに文化的な成熟がみられる。江戸の時代精神の基底には「道徳主義」があった[77]。

篠崎小竹は，弘化４（1847）年序の「評判記」では，「儒家之部」にとりあげられる[78]。

巻軸　大極眞上々吉　篠崎長左衛門

（頭取）東西東西，是れは皆さま御待ちかねの小竹先生でございます（ヒイキ）ヤレまつて居ました。日本一日本一（ワル口）ナニ日本一だ。ヘン銅臭儒者の日本一だらう。

「巻軸（かんじく）」は，「儒家之部」の最高位またはそれと同等の儒者にあたえられる称号である。「上上吉」は，元禄期の「役者評判記」でつかわれた歌舞伎役者の位付の最高位の意味であるが，至，極などの文字を付けくわえれば，さらに上位を示す。なお，貫名省吾，すなわち貫名海屋も「儒家之部」の10人のうちのひとりとしてとりあげられる[79]。評価は「大上々吉」であるが，「當時潤筆取ることは，先生と小竹でござります」と評される。「評判記」の記事は，著名な文士を揶揄嘲笑したものであるが，小竹が市井の儒者として果たした役割が評価された証である。

【註】

1）今関天彭・揖斐高編，『江戸詩人評伝集』 2，平凡社，2015年，148頁。
2）「幕末大坂文人社会の動向」，小堀一正，『近世大坂と知識人社会』，清文堂，1996年，149頁。
3）木崎愛吉，『篠崎小竹』，玉樹香文房，大正13年， 7 頁。
4）那波魯堂，岸上操編，内藤耻叟校訂，『学問源流』少年必読日本文庫第六編，博文館，明治24年，23～24頁。
5）原念斎・東条琴台，『先哲叢談』後，東学堂，明治25年，137～140頁。
6）「長州徂徠学について」，河村一郎著刊，『長州徂徠学』，平成 2 年， 6 頁。
7）「壺中の天」，日野龍夫，『江戸人とユートピア』，岩波書店，2004年，161頁。
8）『正学指掌』附録，頼維勤編，『静寄軒集』（『近世儒家文集集成』第10巻），ぺりかん社，平成 3 年，296頁。
9）湯浅元禎，「文会雑記」，日本随筆大成編輯部編，『日本随筆大成』第 1 期14巻，吉川弘文館，2007年（1993年初版），170頁。
10）頼春水，多治比郁夫校注，「在津紀事」，『当代江戸百化物・在津紀事・仮名世説』，新日本古典文学大系97，岩波書店，2000年，206頁。
11）岡本撫山，『浪華人物誌』巻 1，風俗絵巻図画刊行会，大正 8 年，40～41頁。
12）「菅甘谷墓」，鎌田春雄，『近畿墓跡考』大阪の部，大鐙閣，大正11年，74～77頁。
13）竹林貫一編，『漢学者伝記集成』，名著刊行会，昭和53年，783～791頁。
14）江村北海，『授業編』，同文館編輯局編，『日本教育文庫』学校篇，同文館，明治44年，394頁。
15）『江戸詩人評伝集』 2，337頁。
16）高梨光司，『蒹葭堂小伝』，蒹葭堂会，大正15年，26～27頁。
17）「菅沼東郭墓」，『近畿墓跡考』大阪の部，229～231頁。
18）「三島篠崎先生墓」，『近畿墓跡考』大阪の部，217～220頁。松村操，『近世先哲叢談』続編巻上，巌々堂，明治13年，18～19丁。『浪華人物誌』巻 1，84～89頁。
19）多治比郁夫，「平沢旭山と混沌詩社の成立前後」『大阪府立図書館紀要』第 7 号，1971年 3 月， 3 ～ 4 頁。
20）「文会雑記」，196頁。
21）小島康敬，『徂徠学と反徂徠学』，ぺりかん社，1994年，330頁。
22）「吾與回言章」，中井竹山，『非徴』巻之一，賭春堂，天明 4（1784）年刊。
23）荻生徂徠，『徂徠先生学則』七，『日本教育文庫』学校編，361頁。
24）中野三敏，『十八世紀の江戸文芸――雅と俗の成熟』，岩波書店，2015年，49頁。
25）『江戸人とユートピア』，161～162頁。
26）島田英明，『歴史と永遠――江戸後期の思想水脈』，岩波書店，2018年，31頁。
27）『文会雑記』，170頁。
28）菅茶山，『筆のすさび』，日本随筆大成編輯部編，『日本随筆大成』第一期第 1 巻，吉川弘文館，昭和50年，106頁。
29）衣笠安喜，『近世儒学思想史の研究』，法政大学出版局，2005年，19頁。
30）『篠崎小竹』， 6 頁。
31）斎藤正謙，「小竹篠崎先生墓碑」，五弓豊太郎編，『事実文編』第 3，巻61，國書刊行會，明治44年，413～415頁）
32）木崎好尚，『頼山陽』，新潮社，昭和16年，92～94頁。
33）『近世儒学思想史の研究』，19頁。
34）『篠崎小竹』，15頁。
35）「昌平志」巻第二，『日本教育文庫』学校篇，90頁。
36）文部省編，『日本教育史資料』 7，巻19，文部省，明治25年，102～103頁。
37）鈴木三八男，『聖堂物語』，斯文会，平成元年，27頁。
38）篠崎槩，「家君小竹先生行状」，『事実文編』第 3，巻61，明治44年，415～419頁。
39）巻末資料「古賀精里の門人」，眞壁仁，『徳川後期の学問と政治』，名古屋大学出版会，2007年，630頁。

40) 『篠崎小竹』，19頁。
41) 「倉成龍渚」，大分県教育会編，『大分県偉人伝』，三省堂，明治40年，115～120頁。
42) 笠井助治，『近世藩校に於ける学統学派の研究』下，吉川弘文館，平成６年（昭和45年第１冊），1780頁。
43) 中尾和昇，「『摂津名所図会』の利用法――大田南畝の名所見物」，関西大学『國文學』第100巻，2016年３月，238頁。
44) 『篠崎小竹』，19頁。
45) 同上書，18頁。
46) 「家君小竹先生行状」，417頁。
47) 「拙斎遺文抄」，中村幸彦，岡田武彦校注，『近世後期儒家集』，日本思想大系47，岩波書店，1972年，328頁。
48) 古賀侗庵宛書簡，文化７（1810）年７月，『篠崎小竹』，20頁。
49) 為政第二，金谷治訳注，岩波書店，1996年（1963年第１刷），36頁。
50) 井波律子，『完訳論語』，岩波書店，2016年，44頁。
51) 『中庸』，金谷治訳注，『大学・中庸』，岩波書店，1998年，188～191頁。
52) 『大学』第１章，同上書，36～37頁。
53) 貝原益軒，石川謙校訂，『大和俗訓』，岩波書店，2018年（1938年初刷），53頁。
54) 『学問源流』，23頁。
55) 柴野栗山，『栗山手簡』，寛政学院，昭和15年，２～３頁。越智撰，「静寄軒集序」，『静寄軒集』（『近世儒家文集集成』第10巻），３頁。
56) 「家君小竹先生行状」，416頁。
57) 竹内照夫，『四書五経入門』，平凡社，2000年，306頁。
58) 佐野公治，「晩明の四書学」，九州大学『中国哲学論集』特別号，1981年３月，80頁。
59) 「家君小竹先生行状」，416頁。
60) 土田健次郎，『江戸の朱子学』，筑摩書房，2014年，68頁。
61) 『学問源流』，45頁。
62) 『篠崎小竹』，59頁。
63) 『栗山手簡』，２～３頁。
64) 片山兼山，『山子垂統』前編上，小柳司気太校，『二宮学派・折衷学派』，春陽堂書店，昭和12年，296頁。
65) 『篠崎小竹』，64頁。
66) 島内登志衛編，『谷干城遺稿』上，靖献社，明治45年，32頁。安井息軒は，「篠崎小竹は其の門に入らねは書物を貸さぬ」ために，文政４（1821）年１月に入門する。
67) 大田元貞（錦城），『九経談』巻之１，江戸多稼堂蔵版，文化元（1804）年，２丁。
68) 「儒林評」，日田郡教育会編刊，『淡窓全集』中巻，大正15年，１～２頁。
69) 『九経談』巻之１，13丁。
70) 加地伸行他，『皆川淇園・太田錦城』，明徳出版社，昭和61年，218頁。
71) 安井小太郎，『日本儒学史』，富山房，昭和14年，245頁。
72) 曽根原魯卿宛，春水書簡，安永２（1773）年閏３月，頼祺一，『近世後期朱子学派の研究』，渓水社，1986年，33～34頁。
73) 菅茶山，『筆のすさび』，日本随筆大成編輯部編，『日本随筆大成』第一期第１巻，吉川弘文館，昭和50年，106頁。
74) 『近世後期朱子学派の研究』。宮城公子，『幕末期の思想と習俗』，ぺりかん社，2004年。
75) 宇田川楊軒宛二洲書簡，９月18日付，白木豊，『尾藤二洲伝』，尾藤二洲伝頒布会，昭和54年，86頁。
76) 「朱学維持ノ儀林家へ達」，『日本教育史資料』７，１～２頁。
77) 『十八世紀の江戸文芸――雅と俗の成熟』，64頁。
78) 杉原夷山，『京摂名家評判記賛註』，雅声社，昭和13年（原著，弘化４年末序），10～14丁。
79) 同上書，24～27丁。

## Zusammenfassung

# Über die Bekehrung der Sorai-Schüler Shōchiku Shinozaki zum Neokonfuzianismus

MORIKAWA Jun

Shōchiku ist nicht nur ein Literat, sondern auch ein berühmter Lehrer des Neokonfuzianismus in Osaka.　In seiner Kindheit lernte er bei den Anhänger des Ogyū Sorai.　Nachdem er die Theorien der verschidenen Schulen lernte, bekehrte Shōchiku sich zum Neokonfuzianismus.　In dieser Studie möchte ich untersuchen, unter welchen Umständen er sich zum Neokonfuzianismus bekehrte, und welchen Konfuzianismus er seinen Schüler lehrte.